

教育における「時間-空間-人間関係」問題に関する研究 (3) —ベルクソン哲学を手がかりにしたキャリア教育の検討—

玉木 博章* 藤井 啓之**

*卒業生

**学校教育講座 (教育学)

A Study on Relationship between Time, Space and Human-relation in Education (3): An Examination of Career Education from the aspect of the philosophy of H. Bergson

Hiroaki TAMAKI* and Hiroyuki FUJII**

*Graduate, Aichi University of Education

**Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. 問題の所在と本論の趣旨

「教育における『時間-空間-人間関係』問題に関する研究 (2)」ではチクセントミハイのフロー概念を援用して、キャラ造りをする現在の子どもの人々関係を分析しつつ、第二近代における創造的な教育のあり方についてキャリア教育や自治的活動といった生活指導分野に関連させて述べてきた。しかしながら、研究 (2) ではフローがどのように教育の文脈に反映されるかの可能性に関する内容に議論の焦点を置いたため、具体的な言及の対象となるキャリア教育等の様相に触れないまま、紙幅の関係上、概略的な論述までしか行えなかった。そのため、本来解明すべき今後の教育方針のパラダイム転換にまでは、焦点化できなかった。そこで本稿ではそれらの反省を踏まえ、チクセントミハイの知見によって補強され、具体性を帯びたベルクソン哲学の視点から、現代教育の在り方を捉え直すことで、未来という時間や空間を問題とするキャリア教育を実際どのように再定義しうるのであるのか考えてみたい。また一方で、それに対して生じるであろう批判についてもZ.バウマンやU.ベックら第二近代論者達の現代分析を前提にして検討していくこととする。

II. 未来という概念と教育方法

1. ベルクソンによるカント批判

まずはベルクソンらの視点で捉えたキャリア教育がどのようなものか考えるためにも、研究 (1) や (2) で展開してきた彼らの理論を再度振り返りながら、これ

まで触れていなかった部分も含めて議論していこう。

研究 (1) で触れたベルクソンの思想は、持続と空間という二項対立の概念を用いて展開される時間論であった。持続とは時計で計測されるような細切れにできない主観的な意識の流れであり、量的に扱うことのできない質的なものである¹。それゆえ持続においては時々の瞬間は常に相互に異質であり、相互に浸透し合い、その瞬間の諸状態が再現されることは絶対的に不可能である。換言すれば、このことは、人間の意識の諸状態とは、空間的に展開される数量的な存在とは異なり、明確な因果関係の下に実証されるものではないということを含意している。より具体的に言うならば、ある物質にある薬品を混ぜて常に同じ反応が現れることとは違い、人間の意識というものは同じ作用が加えられても常に同じ結果が出るとは限らないということである。例えば、あるコメディイを見たとしても、そのときの視聴者の身体的・精神的な状況によって、面白さが変わってくるだろう。このことが、人間の意識とは自然科学や数学で扱われるような等質的かつ実証的な存在ではなく、常に異質な存在であることを端的に表現している。

実際にベルクソンは「自由」という概念を挙げ、カントの思想を対象にして実証主義哲学を批判している。ベルクソンによれば、カントは「ちょうど空間内で同じ物理現象が再現されるように、意識の深みにおいても同じ状態が再現されるものである」と思い²込んでおり、それゆえ現実的で自由なはずの自我は、カントの認識の中では外的つまり客観的な存在になってしまったと述べられている³。つまりベルクソンの論

理に従えば、「自由」という概念も本来純粹持続と同じく、常に何物にも捕われない異質な状態であるからこそ「自由」であり、翻って「自由」という概念が実証できてしまうカントの論理は自由を誤解しているということになる。もちろんベルクソンはカントに代表される同系列の思想に対して、我々の経験的思考に堅固な基礎を与え、現象は現象である限りにおいて十全に認識可能であることを保証するという利点を兼ね備えている⁴と述べ、一定の評価はしている。このことはベルクソンが、空間内では我々の主観的意識を客観化した状態に変換することが我々の関心の全てとなる⁵と述べている論理と同種のものとして捉えて良いだろう。常に異質な存在である持続や、ここで論点となっている自由も、誰にとっても認識可能な状態に置換することで、一般の生活や言語の要求には遥かによく応ずるものとなり、このような方が好ましいと思いがちになってしまう⁶ことは、ごく自然なことだとベルクソンが認識していることが見て取れるだろう。だがベルクソンは「目には見えないが現存しているはずの、物自体の存在を告知しないならば、われわれはこうした現象を絶対的なものとみなして、得体のしれない物自体などというものを援用しないで済ますことさえできるはずだ。』⁷そしてまた「等質的だと考えられる持続の中では、同じ状態がふたたびあらわれることができるはずであり、因果性は必然的決定を含むはずであり、すべての自由は了解できないものとなるだろう」⁸とも述べ、カントらの論理を本質的には否定する見解を示している。よっていずれにせよこれらのことから、ベルクソンは自由や主観的時間の流れ（純粹持続）という人間の諸状態は、決して因果関係によって規定されない唯一無二の状態であると捉えている⁹と言える。

2. ベルクソンが描き出す未来像

ではこのようなベルクソンの視点から未来という時間を捉え直すと、いかなるアウトラインが俯瞰できるであろうか。前述した通り、因果関係によって想定できない異質な意識の流れが純粹持続だとすれば、現在の純粹持続の状態から未来の純粹持続の状態を想定することは根本的には不可能だということが示唆できる。常識的に考えれば蓋然的なことかもしれないが、人間の将来がどうなるかを明確に予想することは本質的に不可能だということである。我々が一般的に考える将来とは、あくまで現在の状況がずっと続くという想定下で恣意的に推察されたものに過ぎず、それは実際には未来ではなく現在を延長したものである。このような将来像は、ベルクソンの言葉で言えば、異質的で外在化することの不可能な純粹持続を、空間に延長して客観化し、等質化すること、すなわち質的な純粹持続を量的なものに置き換えることによって初めて想定可能になるものである。なぜならばベルクソンの純

粋持続という概念で将来や夢を捉えた場合、意識の持続的發展の先にこそ、誰も予想できない未だ見ぬ未来があることになるからである。

よってこのように「本質的に未来とは予想できない」という知見に基づいた場合、単純に現在の状況から推定して進路指導を行ったり、キャリア教育を推進したりすることはどのようなメカニズムを孕んでいるのだろうか。以下に記した図を参考に考えてみたい。

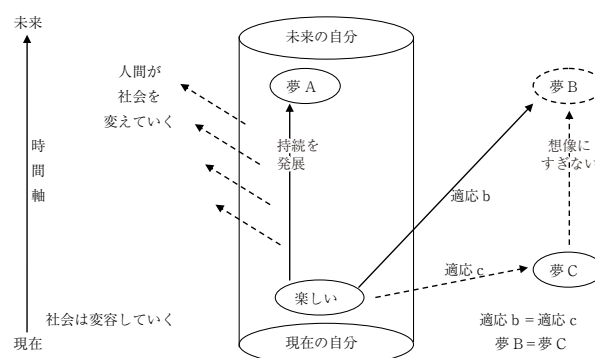


図1 夢の捉え方の違い

ベルクソンに従えば、未来の自分は実証不可能なものである。しかしながらそれに反して多くの人々は夢を持ち、その将来の自分をイメージすることだろう。だがここで強調しておきたいのは、多くの人々が描く将来（夢B）と、ベルクソンの視点から捉えた未来（夢A）は全く異なる対象なのだという点である。

まず多くの人々が描く夢に該当するものが図1の夢Bである。一般的に人々が自分の夢を持つ折には、無意識のうちに現在の多種多様な状況を加味してしまっていることだろう。だがベルクソンがカントを批判して述べた理論に従えば、既にこの時点で、空間には展開不可能なはずの純粹持続（夢）が、空間に歪曲化されて展開されていることになる。加えて夢Bは現在の様々な要素を踏まえた上で描く夢であるため、社会は変容していくにも拘らず、結局夢Bとは現在の状況が将来も続くという前提で描かれた夢になってしまう。つまり夢Bとはあくまで夢Cなのだ。それは現在状況が存続するという想像下でのみ成立しているため、将来の自分の姿を目指すと言いつつも、実際には現在の状況の中に描いた自分の姿を目指していることになる。換言すれば、それは将来に描いた未知の自分の姿に適応すること（適応B）ではなく、現在に実現することができる自分の姿に適応していること（適応C）になるのだ。

このようなメカニズムは、研究（1）や（2）を通して吟味してきた若者のキャラ問題と同種のものであると捉えられるだろう。夢Bを追うことも、純粹持続を無意識のうちに空間に展開し、自分を外的空間に馴染むよう調整していることになる。このことを考慮すれ

ば、単純に現在の状況から推定して進路指導を行ったり、キャリア教育を推進したりすることには、キャリアを造ること同様に、自分の意に沿わないことがあっても既存の職業や社会に自分を適応させなさいというメッセージが潜在化していることを意味する。加えて社会を創造、変革する資質を育む指導はなされず、結果的に変容する社会に適応することしかできない子どもたちを育ててしまう危険性を帯びた指導をしていることにもなりかねないだろう。

では翻って、ベルクソンの純粹持続という視点から捉えた夢はどうだろうか。夢Bとは異なり、純粹持続を歪曲せずに発展させた夢が図1の夢Aである。これはあくまで現在の様々な状況を知りつつも、それらに流されることなく、純粹持続つまりフロー体験¹⁰の楽しさを発展させ、現在の状況に適応することなく、フローを続けられるように現在の状況そのものを変革して実現する夢である。具体的な事例を用いて説明してみるとわかりやすいだろう。例えば十数年前に女の子がプロサッカー選手になりたいと言っていたら人々はどうに反応していただろうか。おそらく、当時の女子サッカーが置かれた状況や女性観が影響して、諸手を挙げて歓迎などしなかっただろう。実際そのような状況でサッカーを続けていくことは本人達にとっても過酷だったはずだ。そして過酷な状況を考慮すれば、行き先不透明な女子サッカー選手という生き方を続ける(夢Aを目指す)よりも、既存する他の職業に生き方の焦点を合わせて、そこへ自分を適応させる(夢Bを目指す)ように生きていった方が遥かに容易だっただろう。しかしその当時に、周囲の反応等に流されて適応することなく、サッカーが楽しいという自分のフロー体験を持続発展させながら未来を創造してきたプレーヤー達がなでしこジャパンを構成している。現在では女の子がプロサッカー選手になりたいという夢に対して、かつてよりも多くの人々が肯定的な態度を取ることだろう。それは、なでしこジャパンの選手達がそれぞれの純粹持続を発展させ、女子サッカーをめぐる世論や経済、文化等の社会空間を変革したからである。

3. 適応的生き方と創造的生き方

このような二項対立の生き方の違いに関する議論は、他の論者にも類似したものが見受けられる。例えば社会学者のZ.バウマンも、既存の社会の中から自分が進むことのできる道を探し出し、その道の上で自分を形成していく生き方を「私の発見」¹¹と呼んでいる。このような生き方は本稿で扱っている「夢Bに規定された適応的な生き方」と同じものだと捉えられるだろう。他方でバウマンは「自己の発明」¹²という概念を挙げ、今を基準にする長期的な自己イメージを持たない自己形成だと説明している。このことは本稿で扱って

いる「現在を持続発展させる夢A」に相当すると考えられるだろう。だがバウマンの述べる「自己の発明」は、本稿が扱っている「夢Aへの持続発展」に比べ、非常に悲観的なニュアンスを感じさせる。だが本当に悲観的に捉えるべきものは夢Bの方ではないのだろうか。ここからはそれについて検討してみたい。

確かにバウマンの述べる通り「夢Aへの持続発展」では、時間をゴールに向かった「積み重なる時間」としてではなく、「流れる時間」として捉えることになる¹³。それは、常に現在の自分を起点にして次の行動を決めていくため、行き先不透明であるが故に不安が付きまとい、成功しなければ自分の努力が無駄になってしまう恐れも随伴する。そしてその結果、人生の方向性の修正を迫られた場合には、そのような努力に費やした時間はゴールに対して積み重ならず、次の目標へ向かう時には流れ去ってしまう。バウマンは、そのような生き方を強いられる現代での様相に対して「生活には気苦労が絶えず、強い不安が付きまとう」¹⁴と非常に憂慮している。このような状況に起因して、未来とは本質的には予想できないものであるにも拘らず、多くの人々は何らかの指標を求めて馴致的に自分をそこに適応させるように生きてしまいがちになるのだろう。それはベルクソンが述べる、質的なものを量的なものに変換してしまいがちなのは、主観的な存在よりも客観的な存在の方が重要性を持つ¹⁵という見解と大きく関連する。なぜならば、その方が一般の生活や言語の要求には遥かによく応ずる¹⁶ため、外界と主観意識との間に一定の指標が生まれ、近視眼的に考えれば不確かな状況から脱出し、他者との意思疎通はもちろん、夢Bのように自分の生き方の指標を暫定的に得ることが容易になるからである。

例えばA.ギデンズが挙げる¹⁷列車の時刻表に関する議論は、時間の流れが主観的でローカルなものから誰にでも共通の客観的なものになったことによる利便性について典型的に示している。遠くの誰かと誰かを繋ぐ列車が、主観的な時間の流れによって運行していたのでは商売等の取引は成立しない。客観的かつ量的な時間を定めて列車が運行することで、いつ何時でも誰もが利用することが可能になるのだ。つまり列車の運行にせよ実生活にせよ、予め決定された、もしくは決定した指標(訪れるだろう将来)から現在を逆算すれば、その指標(将来)に対して現在を調整していくことになり、予定も立てやすくなるだろう。実際に教育的な指導をする際にも、現在を延長して将来の予想をしたり、将来の目標を立て、そこから現在を規定するように子どもたちが歩むべき道を設定したりすること(夢Bへ適応すること)も、有効な方法論の一つではあるだろう。

しかしながらここで留意しなければならないのは、そのように設けられた指標(夢B)は、あくまで仮の

指標に過ぎないという事実である。そもそも研究 (2) でも述べた通り¹⁸、外的な指標を設けてそこに子どもたちを適応させていくような指導 (夢Bへの適応) は、第一近代においてはある程度有効な指導であったのかもしれない。バウマンも第一近代¹⁹のことを「ほとんど確実に、同じ会社で労働人生を終えただろう」²⁰時代だと捉えており、そのことを踏まえれば、自分がどのような職に就きたいかのコース選択さえすれば、目指すべき指標は生き方のモデル別に明確であり、そこへ辿りつく道もある程度可視化されたものであったと推察できる。実際にバウマンも「ソリッド・モダンの教育哲学者は、教師をミサイルの砲手とみなし、発射したミサイルがはじめに与えられた勢いのままに、あらかじめ設計されたコースをきちんと進むにはどうしたらよいかを指導した。」²¹と述べており、キャリア形成のためのコースは予め決まっていたと推察できるだろう。指導する側の教師も、指標を手掛かりにして生徒をコースに乗せて、そのコースに適応させることこそが重要だと認識していただろう。

だがそもそもバウマンは、現代のことをリキッドモダン社会と称して「そこに生きる人々の行為が、一定の習慣やルーティンへと〔あたかも液体が固体へと〕凝固するよりも先に、その行為の条件の方が変わってしまうような社会」²²であるとしている。つまり現代とは物事が定型化するより前に、流動的に崩れていってしまう社会であると言うのだ。加えてバウマンはこのような社会で生きることをリキッドライフと称し、前述したように「不安定な生活であり、たえまない不確実性の中で生きること」²³だと憂慮もしている。つまりこのことは、子どもたちにとっては自分の未来が突然予測不可能なものになる危険性を含有していることになる。バウマンが「過去の経験に学んで、以前うまくいった戦略や戦術を採用するのは賢明ではない」²⁴と述べているように、リキッドモダン社会では自分と同じ経路を辿る者など年長者はもちろん同世代にもおらず²⁵、従うべきモデルや明確な指標も存在しない。指標があったとしてもアテにならず、すぐに流動化してしまう。先述したギデンズによる例に当てはめれば、現代では、来るはずの列車が時刻表通りに到着しないどころか、駅そのものが破壊されたり、乗ったと思った電車が動かなくなったりする可能性の方が高いことになる。ならば逆にこのような現代で仮の指標を絶対的なものと誤認してライフプランを立てること (夢Bへの適応) は、ある意味で無謀なことであるとも考えられる。よって、現在という時間と将来という時間を外的な等質の時間に位置づけて直線的に結ぼうとするキャリア教育は、等質な空間が消滅している現代において必ずしも有効だとは言えないのだ。加えて、仮に有効だとしても、そのように現在状況に適応した将来を描いては、既述したように自分達が生きる未来

をより良く創造、変革してくことは不可能であるだろう。むしろ悲観し、警鐘を鳴らすべきは、夢Bへと適応していくことではないだろうか。ベルクソンは「自由に行動するとは、自己を取り戻すことであり、純粹持続の中にわが身を置き直すことである。」²⁶と述べているが、ここまでの議論を前提にしてこの言葉を再解釈すれば、「空間に適応することなく自らの純粹持続に則って人生を創造してゆけ」という第二近代におけるキャリアデザイン (夢Aへの発展) を推奨しているようにも受け取れる。

Ⅲ. 現代におけるキャリア教育の方針

1. ベルクソンから見るキャリア教育

よってここまでの議論を踏まえれば、本当に必要なことは、よく耳にする「社会に貢献できる人材になること」ではなく「自分が貢献できる社会を創ること」だと言える。既存の体制を維持するための材料として自分自身を社会に適応させるのではなく、自分が快活に生活できる社会へと自らが創り変えていくのだ。そしてキャリア教育も、そうした社会を創造できる子どもたちを育てる指導であるべきだろう。では実際のキャリア教育はそのような創造的性格を帯びているものになっているのだろうか。それは、あるかどうか不透明な架空の将来に適応を迫るような悪しきキャリア教育に収斂してはいないだろうか。

ここからはベルクソンの視点を敷衍して実際の中央教育審議会 (以下「中教審」と略) 答申²⁷や識者の議論を考察することで、現行のキャリア教育の性格について検討してみたい。

まず中教審答申によれば、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であるとされている²⁸。そしてこのキャリア発達を促す具体的な方法の1つとして「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる」職業教育というものがあるとされる²⁹。ここで疑問となるのは、この「一定又は特定の職業」という存在である。ここにベルクソンの視点を反映させてみよう。この答申はいったいどのような「一定又は特定の職業」を想定しているのだろうか。職業教育の対象となる子どもたちが実際に社会に出る頃まで、その職業は現存するものなのか。それによってこの答申の意義は大きく左右される。もちろん十数年先も存続する職業もあるだろうが、そのような職業に就くための教育だけを捉えて職業教育と言うわけではない。そもそも子どもたち全員が、存続する職業に就くための教育を受けられるわけではないし、社会は変容するのだから、職業教育を受けた職業全てが存続するとは限らない。よって「一定又は特定の職業」という曖昧な表

現が問題を生み出してしまう可能性があることは看過できないだろう。

また答申では「職業教育は、我が国の経済・社会の発展を支えるなど、一定の役割を果たしてきており、このことを改めて評価し、再認識しなければならない。また、今後の社会に必要な人材の需要等も踏まえつつ、実践的な職業教育を体系的に整備していくことが必要である。」³⁰と記されている。だがそもそもここで言われている職業教育がどのような内容の職業教育を指し、どのような職業に就くための、具体的にどのような段階の教育を指しているのかで問題は大きく変わる。まず、職業教育自体が一定の役割を果たしてきたという評価はソリッドモダン社会において妥当なものであって、今後の社会に必要な人材の需要など、現代のようなリキッドモダン社会では職種によっては誰にも予想がつかないことはバウマンの見解からも推測できるだろう。だが、そもそも職業教育が指す内容が全職業共通の基礎教養的なものを指すのか、それとも特定の実践的な技能を指すのかで答申の捉え方はいかようにも変化してしまう。仮にここでソリッドモダンに通用した特定職業への実践的スキルだけが職業教育として採用されてしまうのならば、その全てが有効なものとは言えないだろう。そのなかには、将来、存続しない職業もあるはずだ。

他方で、そのような人材は果たして誰にとって必要な人材であり、誰のどのような判断で決定されるものなのだろうか。そのような判断が、仮に政治家や財界の利潤追求のために下されてしまうのならば、このような文言は非常に危険な性格を帯びていることになる。つまり判断を下す側の人間達の論理で子どもたちがいかようにも利用され、自分で決めた夢Bに適應するどころか、一部の人間によって強引に定められた夢を選ばざるをえないような状況に追いやられてしまう可能性もあるのだ。

同様に「特に、我が国においては、少子・高齢化の進展により、労働力人口の減少が予測される中、時代の経済・社会の担い手として、生徒・学生を社会・職業に円滑に移行させるとともに、移行後も、学習活動を通じて、生涯にわたりそれぞれの社会人・職業人としてのキャリア形成を支援していくことが、我が国の持続的発展によって、極めて重要な意味を持つに至っている。」³¹という記述から、子どもたちを現在の延長線上の世界を維持実現するための道具として利用しようとしている意図があるとも汲み取れる。そもそも我が国の持続的発展やその方向性とは誰が決めるものなのだろうか。更には何をもって発展とするのかも疑問である。そのような重要な方向性が、仮に経済的発展のみに収斂するとすれば、そのような持続的発展を望んでいるのは実際に未来を生きる子どもたちではなく現在の大人、その中でも現状社会の延長を望む一部の特

権的な人々³²ではないだろうか。そもそも、当の子どもたちが、国の持続的発展を望んでいるかどうかはもちろん、その中でも経済的な発展のみを望んでいるとは考えづらい。むしろ一部の人々だけが方針決定に携わるような国の発展のために子どもたちを職業教育しようなどという発想は、本来的には順序が逆であるし、あってはならない。子どもたちの豊かな学習活動を生かし、純粋持続を社会に実現するための職業教育があって、結果的に持続的発展することこそ望ましい。仮に国が発展を遂げても、そこに生きる子どもたちの純粋持続が発展した未来が存在しなければ、国が存在しても、幸福な社会とは言えないだろう。

翻って「小学校段階においては、社会生活の中での自らの役割や、働くこと、夢を持つことの大切さを理解、興味・関心の幅の拡大、自己及び他者への積極的関心の形成等、社会性、自主性・自律性、関心・意欲等を養うことが重要である。」³³という文言や「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、『キャリア』の意味するところである。」³⁴という文言は、自らの純粋持続によって社会を変革するという視点に立てば、非常に肯定的な箇所である。「連なり」や「積み重ね」という言葉は純粋持続の発展を現すものとも読み取れ、それがキャリアを意味するのなら、子どもたちの創造性を非常に生かす方針を含意した文言である。ただ「社会生活の中での自らの役割」が規範的に何かに指定されてしまっているのならば、子どもたちの純粋持続が歪曲されてしまう恐れがある。つまりどのような子どもたちの物語なのか、そしてどのような役割があるのかを、純粋持続から生み出していかなければならないのかに留意する必要があるだろう。よってベルクソンの視点でキャリア教育を捉えた場合、必ずしも子どもたちの純粋持続が発展するような性質だけが答申に根付いているわけではなく、むしろそれを阻害するような性質も随伴してしまっていることになる。

一方で、キャリア教育について論じている者達の見解をベルクソンの視点で捉えるといかなる知見が得られるだろうか。例えば玄田有史はこれまでの進路学習や現実の進路指導は、学校を卒業した後どの大学に入るか、どの会社に就職するかといったことが中心で、人生の次の一步を踏み出すことに限定しており、そういったことは就職した会社で誰もが働き続けられる長期雇用の安定した社会でこそ有効であり、現在はそうではないと述べている。そしてその答えとして、長い道のりをどう歩いていくかという知識を身につけるためにキャリア教育が必要であるとしているが、その答えは実際には誰もわからず、わからないからこそ、困難を潜り抜けてきた人が、生きるための知恵として、色々な形でその経験を若い世代に伝えていくこ

と本当のキャリア教育だとの見解を示している³⁵。玄田の見解のポイントは、就社ではなく生き方指導としてのキャリア教育にある。それゆえ、玄田はそのような近視眼的なライフプランではなく長期的なライフプランを描けるような知識の獲得等を目指すことを推奨し、年長者が若年層にアドバイスすることを提言している。だが、このアドバイスは年長者の時代に有効だった生活の指針であり、あくまで年長者が成功した時代の条件がその先も続くという前提でしか有効なものにはなりえない。むしろ本稿で扱ってきた視点を敷衍するならば、生き方自体が変わっているなかで、先人達のアドバイスは必ずしも参考にならない。よって結局のところ、玄田の見解は第一近代のキャリア教育を払拭していないことが浮き彫りになる。

他方で、パウマンの二項対立の自己形成について言及している藤井佳世の見解³⁶は、夢Aを発展させることに対する肯定的な著述として捉えられる。藤井によれば、長期的な自己イメージを持たない自己形成（夢A）は、将来の自己が既に定まり、それに向かって必要なことを一歩ずつ積み重ね、時には自制しながらゴールを目指す自己形成（夢B）とは異なっていると述べられている。夢Bのような固定的な視点から自己を捉えるのではなく、夢Aのように変わり続ける自己を常に肯定することによって、活発な自己形成がなされていくのだ。例えば、プロ野球選手になりたいという夢を持った子どもが多くいたとしても、俊足巧打の選手、守備職人、大型スラッガー等のような野球選手になりたいかは純粹持続が一人ひとり異質的であることと同様に異なるはずである。そして、その夢の形も子どもたちの成長と共に変化していくことだろう。中には敢えてプロを目指すことを辞め、趣味の一部として、またはトレーナーや事務職員等、違った角度から野球に携わることを続けたり、野球に関する新たな仕事を創り出したりする者もいる。だからと言って、彼らが自らの持続を生きていないわけではない。それはむしろ架空の将来から逆算するのではなく、常に現在の自分を起点にして人生の先に描く未来像を柔軟に変化させたことになる。（以上 玉木博章）

2. ベルクソンの枠組みを超えて

ここまでは、ベルクソンを手がかりにして、キャリア教育の課題を分析しているわけだが、〈図1〉に「社会は変容していく」とあるように、すでに、純粹持続の視点からだけでなく、時間の問題が社会という空間との関係で論じられている。すなわち、ベルクソンの枠組みを踏み越えている。なぜそうなるのかと言えば、すでにチクセントミハイのフロー理論との関係で述べたように「ベルクソンは、フロー状態のときの人間の身体の部分や外的空間からの影響を捨象してしまい、意識の側面のみを純化してテーマ化している」³⁷の

であって、現実には、意識に身体や外的空間が不在なわけではないからだ。現実の問題を扱おうとすれば、必ず、捨象されたものを再度位置づけ直して論じざるを得ないことになるのである。

もちろん、ここで空間と時間の不可分性を指摘しているのは、ベルクソンがカントを批判して言うような意識の再現可能性を肯定するためではない。そうではなくて、意識と相互作用する空間そのものが等質ではないということを強調するためである。

このことを少し説明してみたい。人の意識はベルクソンが言うような純粹に内的なものではなくて、その質量ともに常に外界から一定の影響を受けている。しかし、その意識は逆に外界のとらえ方に影響を及ぼす。その結果、意識の外界に対する関係の取り方や行動の仕方を規定することになる。それに基づいて、身体を持つ意識は外界に働きかけることを通して外界そのものを変えることになる。意識を規定している外界そのものを変えるわけだから、変更された外界が意識を規定し返すことで再び意識も変わる。そして新たに作られた意識に基づいて外界との関わり方が変わるといふ無限の連鎖が生まれるわけだ。この繰り返しを念頭に置けば、純粹持続も外的な空間も、今このときと次の瞬間ではともに別のものになっているため、等質ではあり得ない。すなわち、両者とも常に異質なものとして捉えなければならないということになる。

このことをいち早く指摘したのは、マルクスであった。マルクスは、「フォイエルバッハに関するテーゼ」の三において、次のように言う。

環境と教育の変化に関する唯物論的教説は、環境が人間によって変えられ、そして教育者自身が教育されねばならぬことを忘れていた。それゆえ、この教説は社会を二つの部分—そのうちの一方の部分は社会を超えたところにある—に分けざるをえない。

環境の変更と人間的活動または自己変革との一致は、ただ革命的実践としてのみとらえられうるし、合理的に理解されうる。³⁸

ここでマルクスがいうのは、環境は不変の定数などではなく、人間が働きかけることで変化する変数であるということだ。ベルクソンの用語を用いて言えば、世界を「等質性を特徴とする空間」と「異質性を特徴とする時間」という二つに分け、空間と時間は相互に不干渉な別々なものと捉えるのではなく、実践という契機によって両者とも異質性を帯びたものとなるということだ。

このような見地に立ったときに、キャリア教育に関してどのようなことを言いうるだろうか。

第一に、現在においても、時間と空間は繋がっているということだ。だから、〈図1〉にある現在の夢と

現在の社会空間という共時的な平面で輪切りにした場合の純粹持続のありようを検討する必要がある。平面に輪切りにしてしまうと純粹持続ではないという批判もあるかも知れないが、純粹持続は操作上、相互に関連を持つ異質な平面の連続として理解しうるものである。

人は、純粹持続を維持するために、それを支えている諸条件を保持し、それを妨げようとする諸条件を排除したり、改善したりしようとする。たとえば、サッカーを楽しんでいるとき、サッカーのプレイに直接的には関係ないこと、たとえば、グラウンドやボールや靴のコンディション、暑い・寒いとか空腹であるなどの条件はできるだけ意識から排除しようとしたり、「サッカーばかりしていないで宿題しなさい」という親からの忠告は無視しようとしたりするなどである。しかし、サッカーにより集中しようとするれば、整備されたグラウンドで適切な空気圧のボールを用い、サッカーシューズをはいて、適切な気温のなかで、親からしつこく忠告されないように、ある程度宿題にも取り組んでからサッカーを始めた方が良いかもしれない。

純粹持続を維持するさいには、サッカーと同時に、外界からの「雑音」に聞こえないふりをするということでも、「雑音」そのものを減少させるということでも対応可能である。

これをキャリア教育の職業体験学習（本当に希望する職種の職場に行けたと仮定）や職業調べで考えてみよう。前者の場合には、ある職業の良いところばかりを見て、悪いところは見ないようにするということがある。たとえば、和菓子屋に職場体験に行き、「和菓子屋のお客様に対する真心を学ぶことができました」というような例がある。新商品の開発の苦労や和菓子屋の経営上の困難などはほとんど見ないで、お客様に喜んでもらうという「仕事のやり甲斐」だけを見てくるわけだ。確かに和菓子を作り、客に買ってもらい美味しいと言ってもらう喜びはあるだろうし、それだけ考えていられるのであれば幸せの上ないかも知れない。しかし、現実とは異なる。そもそも和菓子屋自体が、和菓子を食べる文化という社会的環境との関係で存在しているのであるから、和菓子づくりを職業にするということは、その文化の盛衰と顧客見込み、それと関連する他の和菓子店との競合など、さまざまな磁場のなかに入るということである。このように、ある職業が持つ共時的な平面を捉えた上で、好きな和菓子作りのために多様な艱難を克服するという共時的水準における多様な働きかけを持続の内容とすることが必要になるのではないか。先のマルクスの引用で言えば、好きな和菓子づくりが艱難を超えて職業として可能かどうかは、それを実現しようとする「革命的実践」を経なければ分からないということになるのかもしれない。

時間を共時的な平面の連続と捉えるならば、ある平

面で行ったことが、個人の内面と環境と、内面と環境の関係を変えることになる。だから、次の平面では、見る個人も、見える環境も、環境の見え方も異なっていることになる。そのような革命的実践に参加した者のみに見える地平というものが生まれるわけだ。そしてその地平が次になすべきことのアフォーダンスを提供することになる。したがって、持続をどのように生きていくべきなのかは、あらかじめ想定することは出来ない。実践を通してその地点に立った者のみに見えるものだからだ。

そうすると第二に、キャリア教育において、未来を予測することに意味はないのだろうか。これに関しては、たとえば、同じくマルクスの次の言葉を参考にしてみたい。

われわれは、ただ人間だけにそなわっているものとしての形態にある労働を想定する。蜘蛛は、織匠の作業にも似た作業をするし、蜜蜂はその蠟房の構造によって多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、もっとも最悪の建築士でさえ最良の蜜蜂にまざっているというのは、建築師は蜜房を蠟で築く前にすでに頭の中で築いているからである。労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像のなかに存在していた、つまり観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである。³⁹

ここでは、将来を設計し、それに到達することができることが人間の固有の能力であると指摘されている。

まず、予め描かれた将来の実現を目指すことは、予め設計図を描いて家を建てようとする建築師の行為とはレベルが異なるということの確認が必要だ。将来設計には、無数の要因が絡んでおり、正確な予測は不可能であろう。バタフライ効果を想起すれば分かることである。しかし、完全な予測が不可能であることと、予測しなくてよいことは別問題である。たとえば、地球規模での気候変動、人口増加、日本の少子高齢化など、全く予測できないわけではなく、ある程度、科学的、あるいは統計的に予測可能なものもある。

問題はここからの対応である。将来は高齢者サービスや環境産業や環境破壊に起因する医療産業が有力であるなどと職業予測することも可能かも知れない。しかし、それは、第一に、現時点で予測した既定の未来の到来を待望しているのであって、純粹持続を空間に展開しているのではなく、架空の空間に意識を適合させているだけである。持続を抑圧して予測した未来に適応させるという先に批判した枠組みに陥っている。第二に、これは一方で、「産業社会は、産業社会によって解放された危険を経済的に利用する。それによって産業社会がさらに危険社会の危険状況と政治の潜在的

可能性をも作り出す⁴⁰と言われるように、リスク社会の悪影響をさらなる産業に結びつけるという構想もあり得る。あるいは、破壊してその後の再建で利益を上げるという『ショック・ドクトリン』⁴¹のビジネスモデルと呼ぶるし、他方で、未来の設計のように見えて、逆説的に、「われ亡きあとに洪水は来たれ！（Après moi le déluge !）」⁴²という資本主義の刹那主義であると捉えることもできる。ここには倫理的な問題が絡んでいるだけでなく、リスク社会は予想しない新たなリスクを生み出し制御不能に陥り兼ねないという論点が排除されている点で、身を委ねることが極めて危険な構想である。先の議論で言えば、実践のなかではつねに新たな環境と主体が作り出され、新たな地平に立ちあがるはずなのに、既定の未来にこだわるあまり、環境問題や人口増加を解決したりすることが予め排除されることを意味するだけでなく、むしろ、その時その時の地平に立った主体の変化や外界からもたらされるアフオーダンスに意識的・無意識的に目をつぶってしまうということだ。そうなる意識は、持続ではなく常に等質な存在となってしまうだろう。

そうではなくて、人間に未来設計能力があるということは、現在明らかになっている気候変動、人口増加、少子高齢化を現在の局面で可能な限り防ぎ、持続可能な社会を実現していくという実践の問題として捉えることで、それに関連した職業や産業が構想されていくというのでなければならぬのではないか。

つまり、環境問題や人口問題などを念頭に置いて持続を実現するキャリア教育を構想する場合には、未来を予測しながら、リスクのある未来が到来しないように現在において取り組めることに最大の努力を払い、その時その時の地平から見えてくる可能性を実現し、リスクを回避する実践を通して、自己を空間に展開し続けることが要請されるのではないだろうか。

しかし、第三に、キャリア教育は果たして職業教育なのかという問題が残される。サッカーが好き、ケーキ作りが好きということに支えられた持続は、確かにサッカーや野球やケーキづくりの腕前を上げるかもしれないし、サッカーや野球やケーキづくりがよりよく行われうる環境を生み出すかも知れない。しかし、皆が皆、持続が職業に結びつくわけではない。持続が、現実態においては、実践を通した絶えざる環境と自己の更新であるという立場から言えば、どこかの地平で「それを職業にするのは困難である」ということがアフオーダされるかもしれない。その場合、持続によってキャリアを形成するというのは、特に職業でなくても良いのではないか。キャリア教育が過度に職業に傾斜することは、人の持続を抑圧するのではないか。たとえば、自分が持続で発展させてきたものをさらに余暇活動として展開するという事もあって良い。その場合には、持続の内容が、余暇時間の確保や余暇活動を

行える空間の確保や創出へと発展するかもしれない。

IV. おわりに

以上、ベルクソンの持続概念を手がかりにしてキャリア教育を考えてきた。ベルクソンが時間の検討を意識面に集中することで抱えてしまった弱点も明らかになったが、その思索に寄り添うことで、将来の夢に依拠するキャリア教育の問題点も見えてきた。

結局の所、ベルクソンの持続概念に触発されたキャリア教育の議論は、人間の幸福追求権・自由権を子どもたちにどのように保障していくのか、幸福追求権・自由権に基づいた社会形成を子どもたちにどう保障していくのか、ということであるように思われる。本論で採り上げた例は、多くは架空の状況である。今後は、さらに、具体的なキャリア教育実践を採り上げ、それらがベルクソンのいう持続を活かしたものになっているのかどうか、子どもたちの幸福追求権・自由権を保障するものになっているのかを詳細に検討することが求められるだろう。

また、標題にある〈人間関係〉の視点まで含めて論じることは出来なかった。稿を改めたい。

(以上 藤井啓之)

註

- 1 H. ベルクソン著、平井啓之訳『時間と自由』白水社、1990年、109頁参照。もしくは玉木博章、藤井啓之「教育における〈時間-空間-人間関係〉問題に関する研究(1) —ベルクソンの時間論を手がかりに—」『愛知教育大学研究報告』第61輯(教育科学編)、2011年、91-92頁参照。
- 2 H. ベルクソン、前掲書、237頁。
- 3 同上。
- 4 同上書、238頁参照。
- 5 同上書、76-77頁参照。
- 6 同上書、132頁参照。
- 7 同上書、238頁。
- 8 同上書、239頁。
- 9 ベルクソンのこれら一連の思想には、人間の諸状態や存在は実証主義的な思想によって決して解明できないという、ある種の神秘的な考え方が伺える。それは奇しくもM. ウェーバーによって説かれた近代合理主義精神の下で進行していった脱魔術化に抗うかのように人間存在の特殊性を主張しているかのようにも読み取れる。なお脱魔術化に関する著述はM. ウェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989年、79-81頁参照。もしくはU. ベック著、東廉、伊藤美登里訳『危険社会 新しい近代への道』法政大学出版局1998年、162頁等を参照。
- 10 フロー体験に関する詳述はM. チクセントミハイ著、今村浩明訳『楽しむということ』思索社、1991年、またはM. チクセントミハイ著、今村浩明訳『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社、1996年参照。もしくは玉木博章、藤井啓之「教育における〈時間-空間-人間関係〉問題に関する研究(2) —チクセントミハイによる「フロー」概念を手がかりにした生活

- 指導の視点から一』『愛知教育大学研究報告』第62輯(教育科学編)、2012年、105-113頁参照。
- 11 Z. バウマン著、伊藤茂訳『アイデンティティ』日本経済評論社、2007年、42頁参照。
- 12 同上。
- 13 同上。
- 14 Z. バウマン著、長谷川啓介訳『リキッドライフ—現代における生の諸相』大月書店、2008年、8頁。
- 15 H. ベルクソン、前掲書、76-77頁参照。
- 16 同上書、132頁参照。
- 17 A. ギデンズ著、松尾精文、小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房、1993年、31-34頁参照。
- 18 玉木博章、藤井啓之、前掲、109頁参照。
- 19 バウマンの著作において第一近代は「ソリッドモダン」として表現されている。なおバウマンが主要な著作において明確にソリッドモダンと記述している箇所は少ない。あくまでリキッドモダンとの比較において、それ以前の時代としてソリッドモダンの特徴が伺える。訳者の森田は前期近代をリキッドモダンと連続しているものとして「ソリッドモダン」と明記しているが、この指摘も訳書全文を通して推察したものだと考えられる。詳しくは森田典正「訳者あとがき」Z. バウマン著、森田典正訳『リキッド・モダニティー—液状化する社会』大月書店2001年、271-279、274頁参照。
- 20 Z. バウマン著、森田典正訳『リキッド・モダニティー—液状化する社会』大月書店2001年、76頁。
- 21 Z. バウマン著、長谷川啓介訳『リキッドライフ—現代における生の諸相』大月書店2008年、201頁。
- 22 同上書、7頁。
- 23 同上書、8頁。
- 24 同上。
- 25 例えば量的調査や質的調査を通して、若者の多種多様な人生経路が明らかになっている。詳しくは乾彰夫『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち—個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店、2010年、127-168頁参照。
- 26 H. ベルクソン著、前掲書、236頁。
- 27 中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)』2011年1月31日、文部科学省ホームページ(2013年6月23日最終確認済) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
- 28 中央教育審議会、前掲、16頁参照。
- 29 同上。
- 30 中央教育審議会、前掲、20頁。
- 31 同上。
- 32 支配者層の思い通りの社会が維持し続けられた場合、支配者層の純粋持続は発展を遂げ、彼らの立場からすれば自分達の思うように社会を変革、創造できたことにはなる。
- 33 中央教育審議会、前掲、39頁。
- 34 中央教育審議会、前掲、17頁。
- 35 玄田有史『希望のつくり方』岩波書店、2010年、193-196頁参照
- 36 藤井佳世「子どもの物語／学校の物語—日定住の自己形成と多様化する学校」高橋勝編『子ども・若者の自己形成空間—教育人間学の視点から』東信社、2011年、171-172頁参照。なお、本稿で提示されている二項対立の概念は、バウマンや藤井が提示しているものと同種のものであると捉えている。
- 37 玉木博章、藤井啓之、2012年、前掲。
- 38 『マルクス=エンゲルス全集 3』大月書店、1963年、7頁。
- 39 『マルクス=エンゲルス全集 23a』大月書店、1965年、235頁。
- 40 ウルリヒ・ベック『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局、1998年、30頁。
- 41 ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン—惨事便乗型資本主義の正体を暴く(上・下)』岩波書店、2011年参照。
- 42 『マルクス=エンゲルス全集 23a』前掲、353頁。

(2013年9月30日受理)